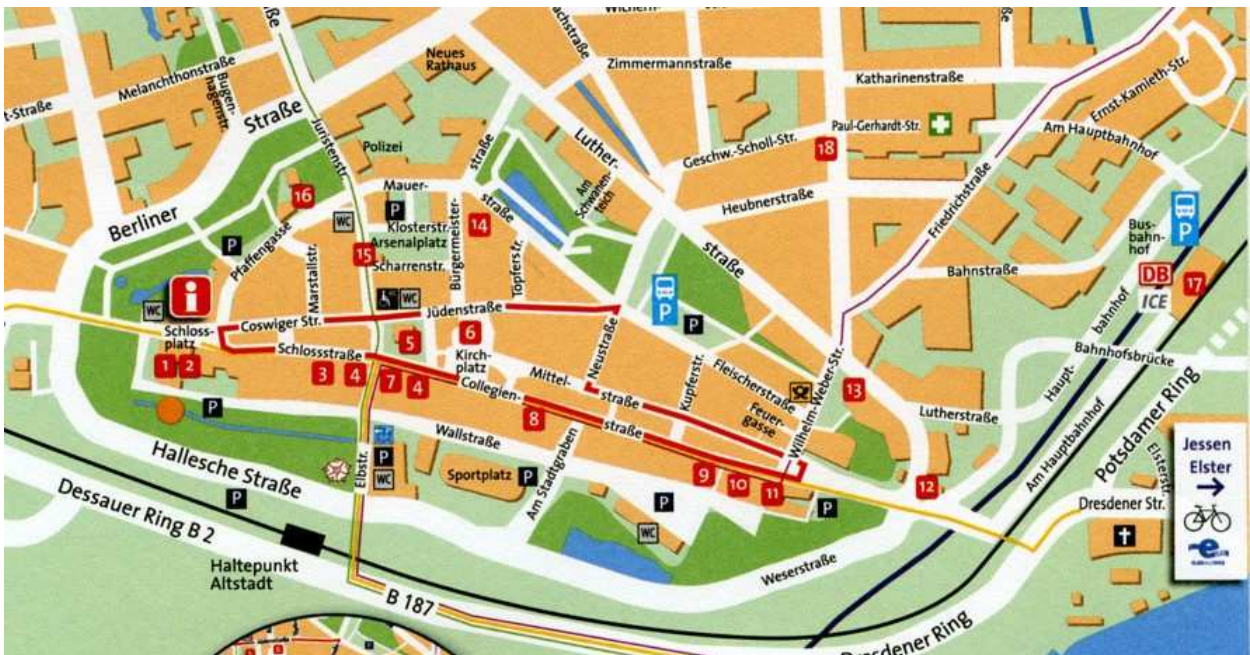


ヴィッテンベルク Wittenberg ドイツ連邦共和国 サクセン・アンハルト州 人口 46,000 人



ヴィッテンベルクの市街図 小さな旧市街は東西約 1.5 km.南北 700m程に収まる。駅は右端中央 DB/ICE の所。

この記事を書き始めた 2017 年は、キリスト教新教プロテスタントが生まれた宗教改革の始まりから、ちょうど 500 年を迎えている。それでは 500 年前に起こった改革とは何なのか。その歴史の舞台が、ドイツ東部の小都市ヴィッテンベルクにあった・・・。

1992 年夏のドイツ語研修でのライプツィヒ滞在は 3 週間近くに及び、授業が平日午前のみだったのを利用して、午後は近在の街などに出かけることが多かった。そんなある日、ライプツィヒ中央駅から電車に乗って、かねてより行きたかったこのヴィッテンベルクを訪ねた。8 月中旬のことである。

列車で 1 時間弱の行程だが、途中、ビターフェルトの街を通る。その郊外に、今は廃れた褐炭の露天掘りのフィールドを見かけた。そして列車がエルベ川を越える頃、車窓から見る平原に広がっていたのは菜の花の群生だった。この地が日本と比べても大分北の国なのだ、想像させるものだった。

ルター都市ヴィッテンベルク

間もなくして、列車はヴィッテンベルクの

駅に到着。二等車のコンパートメントを出てホームに降り立つと、石造りの駅舎に掲げてあったのはルターシュタット・ヴィッテンベルク (Lutherstadt Wittenberg) の駅名標だった。ルターシュタットとは、文字通りこの街を拠点に宗教改革へと向かったマルティン＝ルターの街という意味である。駅舎を通り抜け駅前に出ると、広場には客待ちするカーキ色のベンツが多数止まっていた。駅に降り立つ客も少なく、運転手は集まって暇そうに世間話をしていた。ドイツではタクシーと言えば決まってカーキ色のベンツなのだ。



写真 1 ルターが住居としていた大学校舎の一角

この日の天候は曇り。ただし内陸の穏やかな気候の割には時折風も強く、雲が流れて行くので晴天ものぞく、不安定な天気だった。

さて駅舎から列車の来た方向に戻るように歩いて行く。街はずれの装いで緑も多い所だ。この街でも旧市街を囲んでいた城壁は取り壊れ、緑地帯となっていた。そこからコレギーン(Collegien)通りを市中へと入って行った。すぐ左手の大きな建物は、まさにコレギーン、即ちカレッジ(大学)を意味する建物だ。(地図の①) 500年前、この建物は創設間もないヴィッテンベルク大学の校舎として使われていた。そこに少壮の神学教授、マルティン＝ルターとフィリップ＝メランヒトンらが招かれ、教壇に立ち、その講義を聞きに多くの若き生徒が集まっていた。通りから重い扉を押し開けて中に入るとそこは中庭となっており、奥にある建物がルターの住んだ家で今は博物館となっていた。その博物館へと入る。展示は当時はまだドイツ語表記のみで、書籍や文書などの説明は十分には理解できなかった。印象に残ったものは、学者としてのルターが着用した黒のガウン。大変立派な仕立てだった。また中庭にせり出している塔は、階段で上階へと上がることができるが、そこはルターにとって新しい思想を生み出す思索の場所だったと言う。インテリアは良く保存され、全体として豪華な作りだった。

中庭に出てあの重い扉を開いて通りに戻る。コレギーン通りを行くと、戦前から続くドレスナー銀行が道の右側に仮店舗で営業していた。仮店舗というのは、冷戦が90年に終わり東西ドイツの中、東独が消え去り、それまでこの地に出店できなかった西側の銀行として急ごしらえの店舗を作ったのがドレスナー銀行だったという訳だ。

再び通りの左側に目を転じると、屋根の切妻の装飾が際立っているメランヒトンの家が



写真2 フィリップ・メランヒトンの家

目に留まる(地図の⑩)。ここもこのルターの盟友を記念する博物館となっており、立ち寄って中に入ってみた。入り口近くにある活版印刷機の実物が目に留まった。ルターの語る新しいキリスト教理解は、彼がドイツ語訳聖書を出版したように、それまでラテン語で書かれていた聖書の教えを民衆自ら読めるように、一般庶民にも分かるようにと、ドイツ語のパンフレットとして印刷された。メランヒトンは、その仕掛け人だったと言える。

さらにコレギーン通りを進むと、今度は右手に市庁舎前広場(Rathausplatz)が開ける。歴史ある市庁舎の建物は、あいにく改修中で中に入れなかったが、その広場の中央にはルターのブロンズ像が立ち、その左側にもルター像と同じ小屋根を葺かれたメランヒトンの像が建っていた。二人の改革者は理想化され、凛々しく我々を見下ろしていた。

広場の向かい側には商店が並ぶが、その南西の角には、ルターと同時代の画家ルーカス＝クラナハ(Lucas Cranach)が工房を構えていた建物があった(地図の④)。ただし内部は一般に公開できる状態ではなく、わずかに当時の面影を残すと言われる中庭を覗くことができる程度だった。そこには赤い中古車の

フォルクスワーゲン・ゴルフが止まっていた。ドイツ統一以前、東側だったこの地の人々が、統一後競って西側の車を手に入っていたことを思い出した。

広場から先、コレギーン通りはシュロス通り(Schlossstrasse)と名を変え、それは旧市街の西端にある、ザクセン選帝侯フリードリヒの居城(Schloss)(地図の①)まで続いていた。



写真3 ルターが「95か条」を掲示したという城教会

通りの終わりでは、実際には寄り添う円塔が特徴の城教会(Schloskirche 地図の②)が迎えてくれた。これが、ヴィッテンベルクを世界史の表舞台に立たせた建物である。事件は1517年の10月31日の晩に起こった。当時、常々キリスト(ローマ・カトリック)教会の腐敗をその中に見て、激しい義憤を感じていたマルティン＝ルターは、その教えに疑問を感じ、95か条にわたるキリスト教への自らの見解をしたためこの教会の扉に貼り、多くの人々に公開した。なぜその晩に・・・？

実は、その翌日11月1日は、カトリック教会のお祭り『万聖節(ハロウマス)』で、貼り付けておいたなら必ずや大勢の信徒の目に触れるだろうという期待があった。実際、この95か条の公表は、一地方都市で起きた騒ぎとは言え、時と共に全ドイツに共感の輪と非難の嵐を広げて行くことになる。こうして、ハロウインの晩は改革の記念日にもなった。



写真4 「95か条の論題」が示された扉 複製・鑄造
宗教改革の烽火(のろし)

よくも95か条にもわたって、教会批判を書き連ねたと思う。しかしその核心は、当時の人々にとって一大関心事である死後の救いについてだった。平たく言えば、どうすれば人々に「地獄でなく天国が約束されるのか」と言うことだ。当時のキリスト教会は、ローマ教皇を頂点と仰ぐカトリック教会だった。そして救いは教会が説く善行にあるとされた。現世での善行を実践しなければ死後の救いはないとされた。ところが、当時の教会にはどうも俗世の臭いがプンプンしていた。善行を実践する余裕もない名もなき人々は、教会が発行する『贖宥状(しょくゆうじょう)』という証書を買えば罪が免れ「天国が約束される」と言われた。これをなけなしの金をはたいて購入した。いや、その金も無い貧しい老婆が人から金を借り、その借金を返せず首を吊っただけのと、『贖宥状』販売は過熱した。

ルターは、これを真っ向から否定する。救いは善行に寄らず、我らが全能の神を目に見ることもできないこの神を、信じることができるかこそ救いの道だと言うのだ。難しい話だが、善行を続けて生前どんなに人から善き人と思われても、それは人間界の話であって神はそれを超越している。その神を信じ続けることこそが救いの道だと主張した。その唯

一の拠り所は『聖書』だと言うのだ。そして『聖書』には、ローマ教皇などと言う存在は出てこない。ルターの主張は結果としてルターとその追隨者がローマ=カトリック教会から離れることを意味した。

五百年前のヨーロッパでの話だが、翻って当時の日本はどうだったか？ 戦国時代を描いた司馬遼さんの小説などには、本願寺の門徒衆が織田勢に真っ向勝負を挑み、「南無阿弥陀仏」と六字の名号を唱えて死の突撃を繰り返したと書かれている。門徒らはこの死によって成仏することができた。彼らにとっても死後に成仏できるか否かは、阿弥陀仏に命をかけるほどの意味をもっていた。

二つの教会

95 か条の文字が刻まれた扉はいつも閉ざされている。その脇の扉をくぐって城教会の中へと入る。ゴシック様式の堂内は天井がとりわけ高く、その石造りの重みを感じるほどだった。向かい側の壁には、ルターの両親の肖像が描かれた二枚の絵がかかっていた。作者は先ほどのクラーナハと思われた。そして祭壇の脇に石の箱のようなものが置かれており、彫られた文字を読むと、マルティン=ルターと書いてあった。彼の石棺だった。

さらに祈りを捧げる石造りの像も。その下には、やはり石造の棺が置かれていた。フリードリヒ賢公と読むことができる。この地を治める公のおかげで、ルターは巨大なカトリック教会を相手に闘うことができた。そして新しい宗教運動は、カトリックとは異なるプロテスタント教会へと発展するのである。天井近くから風の音が響いて来た。その近くの窓が一部割れており、音はそこからのものだった。修理用のネットを垣間見ることができた。その揺れを見ると、上空に強風が吹いていることがわかった。

城の教会から出て、行き来た道に戻る。先

ほどの市庁舎前の広場まで来ると、一つ奥まった所に街教会(Stadtkirche)の双塔を見ることができた(地図の⑥)。城教会が言わば貴族や領主のための教会だったのに対し、街教会に集うのは一般市民だった。改革者ルターにとって、聖職者以外理解できぬラテン語で礼拝を執り行っていたカトリック教会は、その信徒が理解できるドイツ語で礼拝をおこなうべき場所だった。この市民が集う会堂で、初めてルターによるドイツ語の説教が語られ始めたのである。1522年、ルターが39歳の時だった。



写真5 街教会(聖マリア聖堂)を俯瞰

会堂の中でひと際目を引くのが、祭壇を飾るクラーナハによる祭壇画。これを読んでいる読者には気づかれた方もいると思うが、「世界の街、フライブルクとコルマール」で紹介したグリュネヴァルトの祭壇画とも似ているように見えるのではと思う。実はグリュネヴァルトもクラーナハも同時代の人であったから、さもありなんと言えそうだ。違うのは、グリュネヴァルトが物事を突き詰めないとならぬ性分だったの対し、クラーナハは現世の利益にもこだわり、人との交友関係も広く浅く、おかげで宮廷画家としてこの街に招かれたにもかかわらず、市政に参画し長く市長を務めることになった。絵画の制作も、後のルーベンスの工房を思わせるほど、弟子を動員して各地からの注文に当たっていたと言う。

もちろん、時の人であったルターとも親交

を結び、その祭壇画にもルターだけでなく、
ちゃっかり自画像を挿入したりしている。さら
に言えば、当時のカトリックの大司教からの
注文にも応じていたと言う。何とも節操が
ない。人間の生き方は、実に様々だ・・・。



**写真5 街教会の祭壇を占めるクラナハの祭壇画
ルター派の伝播と広がり**

この機に改めてルターの本に目を通した。
そしてプロテスタントの広がりを示す本にも
当たることがあった。かねてからルター派が
北ドイツだけでなく北ヨーロッパに広がった
のは何故かと思っていたが、その答えの一つ
は北欧諸国がその国造りに国教としてルター
の教えを受け容れたからとは聞いていた。

しかし、もっと重要なきっかけは、当時の
最新の学問を知る場としてヴィッテンベルク
には、北欧からの留学生が詰めかけていたと
言う。当時、この小さな街にはゲルマン系の
北欧諸国の言葉だけでなく、フィンランド語
さえ響いていたと言う。そう言えば、どの国
の国旗もルター派国教のあの十字架が目印だ。
シェークスピアの戯曲『ハムレット』にはデ
ンマークの皇太子であるハムレットが、ドイ
ツのヴィッテンベルクからの留学を終えた人
物として描かれている。英国の市民でさえ、
このドイツ東部の街に北欧からの学生が詰め
かけていることを知っていたのだろう。

今日、ヴィッテンベルクの街は、この宗教
改革のエピソードしか語られることがないと
でも言うのか、日本のガイドブックでも意図
的にその項目を外したと思える構成が一般的
だ。しかし、単なる観光地巡りでは飽き足り

ない者にとって、そして世界史を知る者にと
って、ヴィッテンベルクはマストの街には違
いない。その由緒ある街は、1996年に世界遺
産に登録された。2017年は、さすがに改革
500周年として賑わったことだろう。

了